

catalogue du Kanjur (J. A. Juillet-Août 1914, p. 111-) で論述したのであつたが、その後同氏はそこに述べた考を改めたと見えて、余に贈つた同誌の抜刷には、自からその p. 121 と、そこに附けた note 3 を黒線で抹殺してある。従つて氏の新説を知り得ないのは遺憾である。それは兎も角この殘簡には、これらの何れでもない *ptmalangkr* = *padmalanjāra* = 蓮華莊嚴といふ梵名が記されてある。これは譯述の當時に、本來の梵名が傳はつてゐなかつたので、漢名に基いてかゝる名稱をつけたのかと思ふが、しかしまたもと／＼かゝる名稱も行はれてゐたのかも知れず、今何れとも斷定し難い。

② *adqangu* は「差別」(Differenzierung) の義に用ゐられること、例へば F. W. K. Müller, *Uigurica II*, 10 に見えるが如きである。この義から出て「境界」の意にあてられたのであらう。

③ *qolunmaq* は「祈願する」の義であること、更めて言ふまでもない。Radloff, *Kuan-si-im Pusar* に附載した華嚴經普賢行願品斷簡 (S. 108. Z. 64) には、これに相當する語を *qolmaq* と寫してあるけれども、恐らくその *+* は *un* の二字を讀み誤つたのであらう。語間の *+* と *un* とは甚だ讀みわけ難いので、往々にして誤讀せられるが、この語の構成から考へれば、*qol-un* と讀むのが正しいであらう。下の III^a にも、大願に對して *uluy qut qolunmar* と記されてある。

④ 漢譯の品名は、「入不思議解脫境界普賢行願品」で、不思議解脫境界に入る普賢行願品と解すべきであらうと思ふが、この譯本には「入」を普賢行願までかけてある。かゝる解釋の當否については、華嚴學者の批判にまつことに致したい。

⑤ *bülük* は *bül-* 分つの義から出て、普通に「品」に對せしめてある語で、例へば British Museum 所藏の回鶻文俱舍論實義疏卷一第三枚に見えるが如きである。ところでこゝに記したやうにこの本文を第四十品と數へることは漢譯には見えぬこととで、この譯本独自の品別のやうである。漢譯本には「大方廣佛華嚴經卷第三十三」と題記し、次の行に「入不思議解脫境界普賢行願品」とあるのみで、品數は記してない。たゞ明本だけに品名の下に「之三十三」の四字を存すること、宿藏の校記に見える如くである。

⑥ *ning* の前に二語を存するが、寫眞では判明し難く、以下偶數頁の初頭に記されてあるものもみな同様である。推讀する